人を、想う力。街を、想う力。 三菱地所

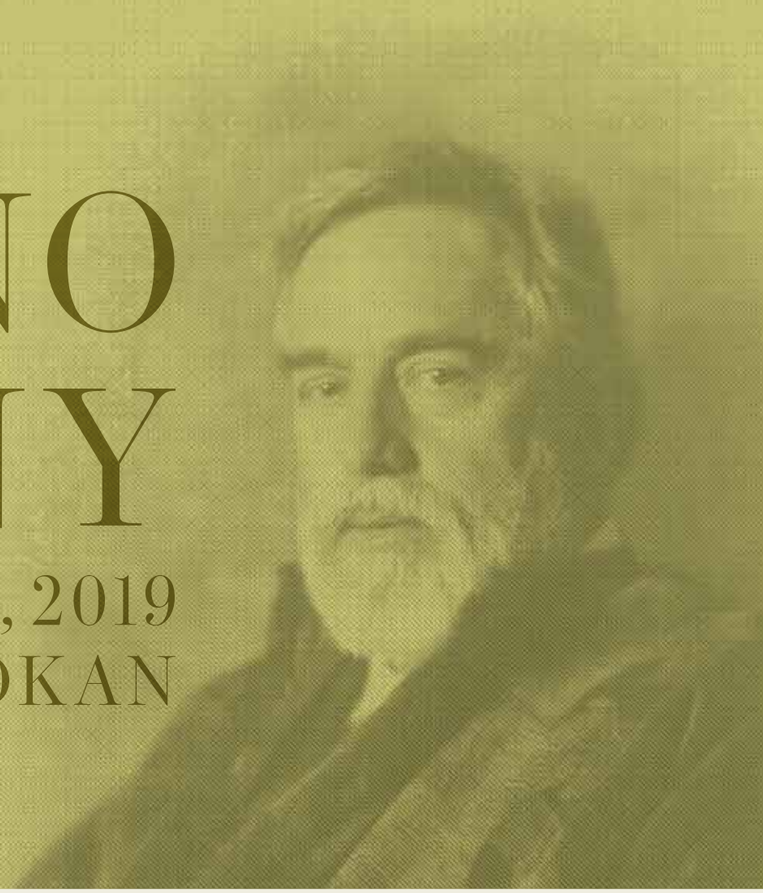
三菱一号館美術館

MITSUBISHI
ICHIGOKAN
MUSEUM,
TOKYO

All About

MARIANO FORTUNY

Sat. 6 JUL.- Sun. 6 OCT., 2019
@MITSUBISHI ICHIGOKAN MUSEUM, TOKYO



マリアノ・フォルチュニ 織りなすデザイン展

軽くてしなやかな「デルフォス」(繊細なプリーツを施した絹のドレス)で一躍20世紀初頭の服飾界の寵児となったマリアノ・フォルチュニ(1871-1949)。彼の邸宅兼アトリエを美術館として公開しているフォルチュニ美術館(ヴェネツィア)の全面的な協力のもと、本展では、フォルチュニ芸術の真骨頂である絹地のドレスやコートなどの服飾作品を軸に、絵画、版画、写真、舞台関連作品、彼が蒐集した日本の染め型紙を含むデザイン関連資料等を総合的に展覧します。グラナダで生まれ、ローマとパリで育ち、ヴェネツィアで制作して成功をおさめた彼の生い立ちから多彩な創作活動まで、近年世界的に注目されている総合芸術家・デザイナーの全貌に迫ります。

3つの見どころ

1.
日本初、20世紀初頭に登場した世界的デザイナー・フォルチュニの業績の全貌を紹介する大回顧展です。

2.
フォルチュニ美術館(ヴェネツィア)の全面協力のもとに開催。同館所蔵作品は全て日本初公開となります。

3.
世界のセレブリティに愛された、約30点(一部展示替えあり)のドレス、コートなどを中心に、絵画、写真、デザイン作品などで構成します。

フォルチュニ美術館

Q 日本では初の開催となる「マリアノ・フォルチュニ 織りなすデザイン展ですが、フェッレッティ館長にとって、この展覧会の魅力とは何でしょうか。また、本展で特に注目すべき点を、教えて頂けますか。

ヴェネツィアのフォルチュニ美術館と東京の三菱一号館美術館の、精力的なコラボレーションの賜物である本展覧会は、今日もなおその燃えたぎるような創造性で我々を驚嘆させ、魅了し続ける一人の芸術家の存在を、より多くの方々にご紹介することを目的としています。内気で控えめな人柄でありながら、激しい前衛性と不屈の研究心を持ったマリアノ・フォルチュニは、古代文化に根差す美の理想の追求に、その精力を傾けました。
フォルチュニは何よりも、画家でした。彼の絵画は、いずれも古(いにしえ)の理想美を内包しています。
やがて彼は、持ち前の旺盛な前衛的精神で、写真、彫刻、舞台美術、デザイン、ファッション、テキスタイルといった応用芸術に活躍の場を見出し、次々と才能を開花させていきます。彼の活動は、芸術的過程の多様性に対する近代的概念や、種々の表現方法の関係性に対する飽くなき探究、過去の芸術への造詣と新しい技術を用いた実験との間にすべからく生じる対話といったものを通して発展した、創作的行程の軌跡であったと言えます。本展では、フォルチュニの最も知られた側面、すなわちテキスタイルのデザインや、ドレス、マント、ショール、舞台衣装の制作だけでなく、あらゆる芸術分野において展開された彼のヴィジョンを明らかにすることを目指します。また、日本の文化と芸術がフォルチュニの創作活動に与えた影響に関する、調査・研究の機会ともなることでしょう。

Q 20世紀初頭の芸術分野において、フォルチュニが果たした根本的役割とは何でしょうか。

フォルチュニの存在は、特に20世紀初頭の数十年間、文化の中心としての重要性を担いました。当時の技術と古代の英知を結び合わせ、芸術と科学の見事な融和を生み出す才能において、彼の右に出る者はいませんでした。彼が考案した、舞台装置(クーポラ)と、拡散光と間接光を用いた照明技術装置からなる複雑なシステムは、演劇界に大きな変革をもたらしました。このシステムは、ヨーロッパの名だたる劇場で採用され、演劇の舞台を一変させることになります。さらに、忠実な伴侶にして彼の制作上のミューズであったアンリエット・ネグランとともに、彼は薄絹や絹ベルベットを使用したテキスタイルのデザインと制作に着手します。時代様式、色彩、装飾モチーフに無限のバリエーションを持つその作品によって、「フォルチュニ」のブランドは、ほどなく全世界に名を馳せるようになりました。そしてフォルチュニは、「デルフォス」で、ドレスの概念そのものに革命をもたらします。
ルイーザ・カザーティ、エレオノーラ・ドゥーゼ、イサドラ・ダンカン、イダ・ルビンシュタイン、ペギー・グッゲンハイム、スーザン・ソンタグ等、20世紀を代表する錚々たる女性たちが身にまとったデルフォスは、時を超えたエレガンスの象徴となるに至ります。
かのマルセル・プルーストが、有名な『失われた時を求めて』の中で、この天才的な創作家に関する熱のこもった記述にページを割いていることからも、フォルチュニの成功が裏付けられます。

Q フォルチュニという人物、また彼の作品の魅力とは何でしょうか。

マリアノ・フォルチュニが持つ最大の魅力の一つは、古代美術の規範を近代の表現法に「翻訳」する、類まれな能力です。遠くかけ離れた異質の要素たちを、現代の創作物の内に収束、融合させる——これこそが、フォルチュニの表現を普遍的かつ超時代的なものたらしめているのです。少年時代に蒐集に目覚めたフォルチュニは、好奇心と博識でこれに深く傾倒し、自らのコレクションを作り上げます。美術品、異なる国や時代の物品、考古学関係書籍、版画、絵画、写真などを買い集めては、秩序だった一種の蒐集目録に整理していましたが、後にそれが彼の創作活動の手引きとなり、刺激を与え、道具ともなりました。このような文化遺産ともいえるほどの卓越した蒐集品のお陰で、フォルチュニは未来に開かれた眼差しを向けながらも、過去を尊重し続けることができたのです。

ダニエラ・フェッレッティ館長Q&A

Q 近年、サンクトペテルブルクやパリ等、各地でフォルチュニに関する展覧会が相次いで開催されています。最近になって世界が彼を評価・称賛し始めたのは、なぜでしょうか。また、フォルチュニの存在は、現代社会においてどのような意味を持つのでしょうか。

マリアノ・フォルチュニは、20世紀前半の西洋の芸術界において、最も魅惑的な人物の一人です。魔術師とも、錬金術師とも言われ、芸術家、職人、変幻自在の発明家でもあったフォルチュニは、その作品の現代性と独創性で、今日もなお我々を魅了してやみません。その天性の才知と多面性から、しばしば近代のレオナルド・ダ・ヴィンチとも称される彼は、現代的意義を大いにはらんだ表現手法の生みの親と言えるでしょう。有名デザイン企業、また人気の頂点に立つデザイナーやインテリア・デザイナーが、現在も彼の作品を再解釈しては、新たに表現し続けていることは、まさにその現れです。

Q 日本の本展来場者へ、メッセージをお願いします。

皆さんがフォルチュニの魅惑的な世界を発見し、楽しんでくださることを心より期待しています。

父母、妻、生活した場所、訪れた土地、憧れた 異国、非凡なアイデア、センス、商才、それは

1. 画家、版画家、舞台芸術家、写真家にして天才デザイナー

フォルチュニは、グラナダで生まれ、ローマ、パリで育ち、ヴェネツィアで制作し、パリとニューヨークで作品を世に送り出した。彼は、服飾・染織デザイナーであっただけでなく、画家、版画家、舞台芸術家、写真家、そして、服飾作品を自ら世界に向けて送り出すプロデューサーでもあった。

マリアノ・フォルチュニ
《タチアオイ》 1923年　テンペラ／板
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

絵画：
絵画はフォルチュニにとり、人生で初めて学んだ、極めて重要な位置を占める表現方法だった。彼は画家を自認しており、服飾の世界で成功した後も生涯描き続けた。

マリアノ・フォルチュニ
《ベーザロ・オルフェイ宮内部 主階》
制作年不詳
カーボンプリント
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Cividicii Venezia - Museo Fortuny

マリアノ・フォルチュニ
《雲の習作、ヴェネツィア》
1915年頃　銀塩ネガプリント　フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

写真：
若くしてカメラを手にしたフォルチュニは大量の写真を残している。自邸であるオルフェイ宮の内部、ヴェネツィアの街角、自身の染織作品の展覧会、エジプト、ギリシャなどの旅先の風景などなど、主題は多彩を極める。また、刻々と表情を変える雲に魅せられ、ヴェネツィアやパリの空を斬新な構図で切り取った。

2. 芸術家の系譜

父と祖父がプラド美術館の館長を務め、画家、建築家、美術評論家を輩出したスペインでも重要な芸術家一家出身の母。高名なオリエンタリスムの画家で、19世紀スペイン画壇の中心的な存在の父。芸術家の家系に連なるフォルチュニは父の作品にも描かれており、プラド美術館でも名品とされる《日本式居間にいる画家の子供たち》(1871年)には姉マリア・ルイサと共に遊ぶ姿がある。

マリアノ・フォルチュニ
《バラ色の衣装のための習作(アンリエット・フォルチュニ)》
1932年　テンペラ／厚紙　フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

マリアノ・フォルチュニ
《テキスタイルのための下図》 1907年以降
プリントした絹タフタ、厚紙に貼り付け
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

フォルチュニと日本：
フォルチュニが所蔵していた日本の染め型紙のひとつ。彼は型紙を用いた防染染めの技術にも通じ、プリントの技術に生かしたとされる。

マリアノ・フォルチュニ
《染め型紙》 19世紀末　和紙、柿渋、絹糸　フォルチュニ美術館蔵
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

3. フォルチュニと絵画

三歳で父を失ったフォルチュニは、父に憧れて画家を目指し、パリではアカデミスムの画家でオリエンタリスムに傾倒したバンジャマン＝コンスタンに絵画を学ぶ。そして、屋敷に残る父の作品や、ヴェネツィアで身近に目にすることのできるカルパッチョやティントレットらオールドマスターの作品の模写、「デルフォス」を身につけた妻のアンリエット、また若くして感銘を受けたリヒャルト・ワーグナーの歌劇の場面などを描いた。1895年にはじまったヴェネツィア・ビエンナーレにも何度も絵画を出品している。

マリアノ・フォルチュニ
《ワーグナーのオペラ
『パルジファル』よりクンドリ》
制作年不詳　テンペラ／板
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

妻アンリエット：
パリで出会った美しい妻アンリエットは絵画や写真のモデルを務め、染織においてはフォルチュニの優秀な助手であった。

マリアノ・フォルチュニ
《アンリエット・フォルチュニ、芸術家の妻》
1915年　テンペラ／厚紙　フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

ワグネリアン：
青春時代にリヒャルト・ワーグナーの歌劇に感動したフォルチュニは、舞台照明や劇場設計にたずさわっただけでなく、その場面を主題とした絵画を多く残した。

マリアノ・フォルチュニ
《ワーグナーのオペラ『ニーベルングの指輪』より
ジークフリートとラインの乙女》
テンペラ／板　制作年不詳
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

マリアノ・フォルチュニ
《テーブル・ランプ》 1925年以降
木、金属　フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

4. ワーグナーと舞台

フォルチュニは10代でリヒャルト・ワーグナーの歌劇に魅せられ、舞台照明、劇場設計、舞台衣装など舞台関係の仕事を手がけるようになる。フォルチュニが開発した間接照明は舞台上の演者を美しく見せ、機械的なシステムが朝から夜までの光の変化を表すことを可能とした。また彼は『ニュルンベルクのマイスタージンガー』、『ニーベルングの指輪』、『パルジファル』などの場面を多数絵画に残している。

All About MARIANO

マリアノ・フォルチュニの人生そのものでした。

5. フォルチュニ芸術の粋 服飾と染織

日本から輸入されたといわれる最高級の絹地を鮮やかな色彩に染め、繊細なプリーツを施したドレス「デルフォス」、そして絹ベルベットにエキゾチックな模様をプリントしたマントやジャケット。それらは、東洋の魔術的なイメージに彩られた水都ヴェネツィアで制作され、パリとニューヨークで販売された。ごく軽くて華やかな「デルフォス」は、それまで身体を極度に締め付けていたコルセットから女性を解放し、女性の肢体の自然な曲線を美しく飾った。

マリアノ・フォルチュニ
《フード付きケープ》 1930年代　絹ベルベットにステンシル・プリント
神戸ファッション美術館

アリナーリ兄弟社
《デルフォイの御者》 19世紀末　アルビューメン・プリント
フォルチュニ美術館　©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

《デルフォイの御者》:
「デルフォス」のインスピレーションとなった、紀元前5世紀に制作された厳格様式の青銅彫刻。1896年にデルフィのアポロン神殿で発見された。
※彫刻は展示されません

マリアノ・フォルチュニ
《デルフォス》 1910年代　絹サテン、トンボ玉　島根県立石見美術館
※展示期間 8/20 ~ 10/6

日本とその影響:
妻のアンリエットは室内着として日本のきものを日常的に使用していた。フォルチュニがデザインした上衣にはきものの形状の影響を受けているものもある。

参考:マリアノ・フォルチュニ撮影
《デルフォス》を身につけたモデル
1920年頃　現代プリント
フォルチュニ美術館
©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

《デルフォス》:
極上の絹地をさまざまな鮮やかな色に染め、手仕事で細かな襞をつけた布地で仕立てられた。

マリアノ・フォルチュニ
《室内着》
1910年代　絹タフタにステンシル・プリント
公益財団法人 京都服飾文化研究財団　撮影:リチャード・ホートン

FORTUNY

All About MARIANO FORTUNY

マリアノ・フォルチュニ
織りなすデザイン展

会期	2019年7月6日(土)～10月6日(日)
開館時間	10:00～18:00 ※入館は閉館の30分前まで(祝日を除く金曜、第2水曜、8/12～15、会期最終週平日は21:00まで)
休館日	月曜休館(但し、祝日・振替休日の場合、9/30とトークフリーデーの7/29、8/26は開館)
入館料・当日券	一般:1,700円　高校・大学生:1,000円　小・中学生:500円
前売券	一般のみ:1,500円 ※ペア券はチケットぴあでのみ販売します。 ※大学生以下、ペア(一般)は前売券の設定はありません。

※障がい者手帳をお持ちの方は半額、付添の方1名まで無料　※学生無料ウィーク:7/20~31

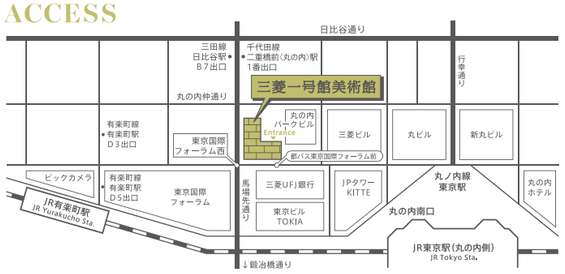
前売券販売情報

2019年3月14日～2019年7月5日まで:ローソン/ミニストップ、チケットぴあ、セブンチケット、都内チケットポート、三菱一号館美術館チケット購入サイトWEBKET(QRコード読み取り)
2019年3月14日～2019年6月9日まで:Store1894(三菱一号館美術館内、休館日は美術館に準ずる・Store1894のみの利用可)※絵柄入りのチケットは、Store1894と都内チケットポートで販売しています。

アフター5女子割

第2水曜日17時以降/当日券一般(女性のみ)1,000円 ※他の割引との併用不可 ※利用の際は「女子割」での当日券ご購入の旨お申し出ください。

ACCESS



● JR「東京」駅(丸の内南口)徒歩5分 ● JR「有楽町」駅(国際フォーラム口)徒歩6分
●都営三田線「日比谷」駅(B7出口)徒歩3分 ●東京メトロ千代田線「二重橋前」駅(1番出口)徒歩3分 ●東京メトロ有楽町線「有楽町」駅(D3/D5出口)徒歩6分 ●東京メトロ丸ノ内線「東京」駅(地下道直結)徒歩6分

「マリアノ・フォルチュニ　織りなすデザイン展」記念シンポジウム(仮)

日　時:2019年7月6日(土)14:00～16:30(受付開始13:30)
登壇者:ダニエラ・フェッレッティ氏(フォルチュニ美術館 館長)
陣内秀信氏(法政大学江戸東京研究センター特任教授)
朝倉三枝氏(フェリス女学院大学准教授)
司　会:阿佐美淑子(三菱一号館美術館 本展担当学芸員)
会　場:東京商工会議所ホール&カンファレンスルーム
(丸の内二重橋ビル5F)

■詳細が決まり次第、美術館公式WEBサイトにてお知らせいたします。

主催:三菱一号館美術館、毎日新聞社、フォルチュニ美術館、ヴェネツィア市立博物館群財団
後援:イタリア大使館　協賛:大日本印刷
協力:アリタリア-イタリア航空
お問い合わせ:03-5777-8600(ハローダイヤル)
展覧会サイト:https://mimt.jp/fortuny
美術館サイト:https://mimt.jp/

Ambasciata d'Italia Tokyo

表紙:マリアノ・フォルチュニ《オペラジャケット》1920年代　絹ゴーズにステンシル・プリント、トンボ玉　マリアノ・フォルチュニ《デルフォス》 1920年代　絹サテン、トンボ玉
神戸ファッション美術館　中面写真:作者不詳《マリアノ・フォルチュニ》制作年不詳
フォルチュニ美術館　©Fondazione Musei Civici di Venezia - Museo Fortuny

三菱一号館美術館

〒100-0005　東京都千代田区丸の内2-6-2